

吉永さんに伝えた 都路の伝統や未来

田村訪問に地元の子どもたち



福島の子どもが書いた詩を朗読する吉永小百合さん

東京電力福島第一原発事故で避難指示区域だった田村市都路町に先月25日、俳優の吉永小百合さんが訪れ、市立都路小、都路中学校の児童や生徒たちと交流した。伝統を受け継ぎ、未来を語る子供たちの姿に、吉永さんは「胸がいっぱいになりました。困難なことがたくさんあると思うけれど、みんなで励ましてほしい」と語りかけた。

詩の朗読や合唱で交流

都路地区は2014年4月に避難指示が解除されたが、児童が減少。地元の古道小と岩井沢小が今春に統合して都路小が開校した。いまも避難先からスクールバスで通う児童もいるという。

吉永さんは原発や福島の原発事故をめぐる詩の朗読を続けている。福島の被災地を折々に訪れて励ましていることを知った古道小時代の校長の根内喜代重さん(現・市立大越小校長)が「古道小の子も頑張っていることを知ってもらえたら、みんなの心の支えになる」と手紙を書いて実現した。

この日は保護者らを含め198人が吉永さんを迎えた。避難先の仮校舎を経て再開するまでの道のりをスクリーンに映したほか、地元で伝わる和太鼓の演奏や三匹獅子舞を披露した。



子どもらの肩に手を添えて記念撮影に臨む吉永さん。いずれも田村市都路町

渡辺えまさん(小5)は「どんなときも前向きで明るい保育士になりたい」と夢を話した。武田隼君(中3)は夏に長崎に派遣された経緯から「原発事故という一つの出来事が福島を傷つけ、一発の原子爆弾が長崎の人のすべてを奪った。核の脅威は私たちに無関係ではない。悲劇を繰り返さないために何ができるか考えたい」と決意を述べた。

その後、吉永さんは福島在住の高校教諭で詩人の和合亮一さんが震災後にツイッターで多くの詩を発信したことに触れ、「私も詩に出会って、福島のことをたくさん知るようになった」と語った。和合さんのもとで、震災を経験した子どもたちがつくった詩のうち、「母」「あのを登れば」の2編を朗読した。

朗読を聞いた吉田陽平君(中1)は「ふるさとの福島に自分たちも育てられていると実感した」と話した。

最後は、児童らが開発に関わったキョウリジャムを吉永さんに渡し、一緒に合唱や記念写真に臨んだ。

(高木智子)